

# 「最

近の若者は…」というセリフは紀元前からあるらしいが、最近の若者、とくに男の子の「草食系」的かつ内向的な姿勢は由々しき事態だと、私は心配している。

海外への留学生の数が激減したという話も聞いて久しい。

女の子はまだマシだ。

2月にヨーロッパに行ったとき、フランクフルトの空港での乗継便への移動のバスが、日本人の女子大生だらけだったことがある。聞くと卒業旅行だという。男の子はほとんどいない。女の子は好奇心があり、フットワークも軽い。私の会社の採用試験の面接でも、女の子の方がしつかりしている。男の子は、基本的には自宅にこもる。ネットとゲーム。外出はコ

ンビニカバイトのみ。「なぜたくさんのお金を払って、わざわざメンドウなところに行くの？ 行かなくてもネットでだいたいわかるし」と海外旅行はしない。

今のこういう若者が社会のリーダーになる20年後、30年後、この日本はどうなってしまうのだろうか。私を含めた多くの大人の共通の心配ごとだろう。

それに対する処方箋はないのだろうか。

もちろん、ある。

早期発見・早期「治療」がよい。つまり、子どもが小さなときから好奇心を引き出し、親が労を厭わずに一緒にいろいろやってみる、あるいは、やらせてみるとよい。その際に肯定的に育てることが大事だ。子どもはアラを探せばキ

リがない。ちょっとでも進歩があれば、それをきちんと褒める。

そうすると、好奇心が育ち、前向きな子どもになる。

「うちの子はもう中学生なんです…」という場合、あるいは、それより大きい場合はどうしたらよいのだろうか。

私も、子どもが大きくなったとき「処方箋」は書きあぐねっていた。

先日、拓殖大学総長・学長の渡辺利夫先生から、「面白い話を聞いた。初めて聞く内容だった。

渡辺先生は、拓殖大学に国際学部をつくった先生でもあるが、国際学部では、アジア、アフリカ、中南米などの開発途上国を中心に、国際人としての行動力とコミュニケーション能力を備えた人材の育成を目指しているという。

耳の  
痛い  
ハナシ

文 石井至

## 第5回 わが子を「外向き」にする

渡辺先生は言う。「日本人のDNAには組織化する能力が備わっていると思います」と。

つまり、内向きな男子学生でも、アジアの僻地に連れて行き、現地の子どものための「子ども会」のリーダーのようなことをさせると、自然と、上手に子どもたちをまとめるようになるというのだ。

それは、その男子学生自身にも驚きで、「俺もやればできるので」と自信を持ち始めるという。

もちろん「内向き」だから、そのような環境にそもそも行こうとはしないだろうが、海外でなくても、地元で子どもと遊ぶボランティアに参加させると、「日本人のDNA」が目覚める可能性がある。自分の子どもを「外向き」にしたい方にお勧めの「治療」だ。

いしいいたる

1965年北海道札幌生まれ。東京大学医学部卒（PhD）。当誌アドバイザー、駐日ドミニカ共和国大使館名誉相談役、駐日ルワンダ共和国大使館特別顧問、東京都市大学付属小学校学校評議員など歴任。「慶應幼稚舎」（幻冬舎）など著書多数。最新著は「グローバル資本主義を卒業した僕の選択と結論」（日経BP社）。